The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Keith Ansell Pearson, ”Germinal Life : The Difference and Repetition of Deleuze”, Routledge,1999.
Author(s)	米田, 翼
Citation	年報人間科学. 2014, 35, p. 143-147
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Keith Ansell Pearson
Germinal Life: The Difference and Repetition of Deleuze
Routledge,1999.

米田　翼

はじめに――今、*Germinal Life* を再読する意義

本書は、ニーチェやベルクソン、そしてドゥルーズを中心とした生の哲学を研究する英国ウォーリック大学哲学研究科教授キース・アンセル・パーソンのドゥルーズ論である。同じく本書を論じた橋（2008）によれば、「多様で複雑とすらいえるドゥルーズの著作群を初期から晩期まで、たかだか250頁ほどの一巻に纏め上げたその集約力」という点で、本書は賞賛に値するが、「章立て等の設定した枠組みからして、当初できると期待された論証」、すなわち「ドゥルーズへのベルクソンの影響が他のどの哲学者にもまして決定的なものである」という論証については明確な解答を与えていないという問題点を残している[1)]。しかし、本書のもつポテンシャルは、ベルクソスムの影響を考慮した単なるドゥルーズ哲学のまとめ、という言葉におさまるものであろうか。本書が出版されてから14年の歳月を経た現在、当然ドゥルーズ研究は大きく進展しており、かたいまとめとしてのドゥルーズ論であれば、本書を再読する必要性は特にないように思える。では、*Germinal Life* と題される本書を、今ここで再び採り上げる意味はどこにあるのであろうか。

本書の射程を明らかにするために、パーソンの仕事のなかで本書を位置づけてみよう。静的な物質的実利主義を越えるための脱人間的な哲学を展開した、自身の処女作となるニーチェ論[2)]に続く本書は、ニーチェ論での目論み、すなわち人間の条件を「越えて（beyond）」いくような超人の哲学としての生命哲学の構築、という課題を基本的には引き受けつつ、その可能性をドゥルーズの哲学の中に見出だそうとするものである。また、それは、「新たな生物学」（本書, p. 147）として、ドゥルーズ哲学を素描することでもある。この「新たな生物学」という言葉でパーソンが意図しているのは、分子生物学によって持続を排除された生命の時間を取り戻すような持続の哲学であり、それは本書に続くベルクソン論[3)]で中心的に扱われた問題でもある。このように、生命を物質に還元する分子生物学を「越えて」いくような形而上学的な生物学のために、ニーチェやベルクソンを読解していくというのが、パーソンの一つの方向性である、しかし、他方でパーソンはこうした形而上学的な生物学が、真に「新たな生物学」たりうるか、つまり机上の空論に終始せず、科学的言説にも耐えうるものであるかを常に吟味し続ける[4)]。本書は、まさにこうした文脈のなかで捉えられねばならない。生の哲学が哲学に留まらず、「新たな生物学」として展開できるかどうか、その可能性をドゥルーズの哲学に内在的なかたちで読み解きつつ、科学のふるいにかけてい

くこと。そして、その先に見えてくる創造的な倫理学を切り開くこと。それこそが、本書を再読する現代的意義にほかならない。

それゆえ、本論では、本書の章立てに従って各章を検討しつつ、ドゥルーズの概念をベルクソニスムとの連関のなかで拾っていくという道は取らない。評者の仕事とは、著者の議論を単に「繰り返す（repeating）」のではなく、そのエッセンスを抽出して議論を再構成することで、その著作を「開く」ことである。以下、ヴァイスマン、ベルクソン、ドゥルーズという「差異と反復（difference and repetition）」の生命論の系譜に則って議論を再構成する、というかたちで、生の哲学と生物学の接続を試みるパーソンの行く末を見定めたいと思う。

ヴァイスマンの生殖質説

19世紀というのはまさに反復の生物学の世紀といっても過言ではない。ダーウィンの進化論を受けて、生命の連続性がはじめて問題になったのがこの19世紀であり、「反復説」による前成説を説いたヘッケルをはじめとする多くの発生学者たちは生命の反復を問題とした。

そうした反復の生物学のなかでもドゥルーズ――そして、ベルクソン――がとりわけ重視するのは、ヴァイスマンである。ヴァイスマンは、「生殖細胞（the germ cells）」と「体細胞（the somatic cells）」を区別し、遺伝において重要な役割を担う、すなわち生命の連続性を担うのは前者であり、後者は遺伝には関与しない、という生殖質説を展開する（本書，5）。一見すると、生殖質に書き込まれている情報をひたすら反復して継承し続けるヴァイスマンの遺伝論からは、差異が入り込む余地はないように思える。それは、体細胞からの相互作用を認めない生殖質が単に連続しているだけで、同じものの反復しか担わないのであれば、「変異（variation）」が生じる余地がないためである。だが、ここでヴァイスマンは生殖細胞と体細胞の相互作用とは別の道筋で差異の生成の道を示している。相互作用がない以上、それは生殖細胞のみで展開されるしかない。絶え間ない生殖細胞の「複製（reproduction）」の過程で、ランダムに生じる「変化（mutation）」、それがヴァイスマンの差異の原理である。生殖細胞が表現するゲノムの系譜は、不死性を有し（本書，6）、ときにそれが変化を起こして新たな種を構成する。この立場は後述するベルクソンへと大きな影響を及ぼすことになる。

ベルクソンにおける持続の問題

20世紀に確立した分子生物学が、生殖質説から出発してDNAという物質的な要因に生命を還元しようとしたのに対し、ベルクソンは、潜在的な時間である「持続（duration）」の相の下で生殖質説を捉え直す（本書, p.33）。ヴァイスマンにとって、「胚的な生命（germinal life）」が生殖質の連続性にほかならないのであれば、ベルクソンにとってそれは、「強度（intensity）の源泉」としての「持続」にこそ見出だされるものであり、「持続」とは「遺伝的なエネルギーの連続性」なのである（本書, p. 39）。ただし、ベルクソンは、生殖質における物理 - 化学的な要素を切り捨てるわけではなく（本書, p. 40）、進化のなかでの「恒久的な創出（invention）」（*Ibid.*）の原理として「持続」という生命の原理をそれに付け加えているのだ。

とはいえ、機械論的な途を選択するヴァイスマンにしろ、生気論的な原理によってヴァイスマンの議論を補完するベルクソンにしろ、生命が「超個体的（supraindividual）」な連続性であり、有機体はDNAあるいは「持続」の単なる乗り物にすぎないと考えている点では共通している（本書, p. 72）。ヴァイスマンもベルクソンも、生殖質あるいは「持続」の連続性に基づく種の生物学にすぎず（本書, p. 7）、個体の価値を単なる反復として限界づけてしまうという限界を背負っているのだ（本書, p.77）。

ベルクソンとシモンドンの個体化論の差異

さて、ドゥルーズは、ヴァイスマンやベルクソンの提示する種の進化というヴィジョンを「超越論的な幻想（transcendental illusion）」として退けるが、そのような虚妄を消し去るためにここで問題にすべきは「個体化（individuation）」である（*Ibid.*）。「差異と反復―出来事の胚的な生命」と題される本書の第二章において、パーソンはシモンドンの個体化論に言及しつつ、「出来事（event）」として、「胚的な生命 germinal life」を捉え直そうとする（本書, p. 90-96）。ここで彼は『差異と反復』におけるベルクソニスムの残滓を完全に乗り「越えて」いくものとしてシモンドン - ドゥルーズというラインを描き出そうとしているのである（本書, p. 79）。以下、本論第二章より「個体化―シモンドンとダーウィンの差異」という節に沿って流れを確認する。

原子論的方法であれ、質料形相論的方法であれ、その個体を個体たらしめる個体化の原理、は取りこぼされがちであった。それゆえ、シモンドンは「個体化を通して個体を認識する」というスタンスをとる。個体はそれ自身において完結した存在ではなく、個体化というプロセスの一つの帰結としてのみ生じる。この意味ではヴァイスマンとベルクソンはシモンドンの祖先であり、彼らの間に差異はない。しかし、シモンドンはさらに歩みを進める。個体ではなく個体化の原理がプリミティブなものであるとする以上、個体に先立つものがなければならない。それゆえシモンドンが第一の実在として想定するものが「前 - 個体的preindividual」な存在である。前 - 個体的存在は確かに個体に先立つが、それが自ずと個体化するというわけではなく、その構造的契機となる「構造的胚」が導入される必要がある。この「構造的胚」がシモンドンにおける「胚的な生命」にほかならない。そしてドゥルーズはこれを「器官なき身体（body without organs）」として読み替えていく（本書, pp. 116-117）。ここで、ヴァイスマン - ベルクソンの系譜とシモンドンの間に一つの差異が見出だせる。すなわち、純粋潜在性たる生命の根源をエラン・ヴィタルという生命の原初的爆発にしか認めないベルクソン（本書, p.67）に対し、シモンドンは、前 - 個体的存在と構造的胚が共鳴することによって、個体が生じるプロセスを描き出す。シモンドンの個体化論における「構造的胚」に類される「器官なき身体」、それは『差異と反復』において潜在性の現働化として描き出されたベルクソン的な個体化を「越えて」いくための装置であり、そしてドゥルーズにとっての「胚的な生命」そのものなのである。

ドゥルーズの器官なき身体

ここまでの道筋を指し示したところで、パーソンは議論を『千のプラトー』へと移す。生殖質説は生命

の連続性を主張しはするものの、物理 - 化学的な系に議論領域をしぼった閉じたシステムである。内的な原理のみを問題とし、外界との相互作用を認めないこうした閉塞的な生命論としてのヴァイスマンを、例えばフロイトは「死の欲動（death-drive）」という議論で、動的な系として捉え直そうとする（本書, p. 109-110）。その一方で、ドゥルーズは「器官なき身体」（以下CsO）を問題とすることでヴァイスマンを「越えて」いく。これは本書第一章におけるベルクソンの限界を突き破るものでもある。ベルクソン的な「持続」が抱える問題の一つは、「凝縮（contraction）」と「弛緩（relaxation）」という二つの「傾向（tendencies）」を峻別した後に、持続の取り分を前者に、空間の取り分を後者に与えることだが、そもそも両者の間には「程度の差異（difference of degree）」しか横たわっていないはずであり、そこに「本性の差異（difference of nature）」はない（本書, p. 65）。ともすれば、この二元論的対立の超克として差異の原理が求められねばならないが、それこそが純粋な強度の場であり、内包的な空間であるところのCsOなのである（本書, p. 189）。CsOは存在ではなく「生成（becoming）」である、とパーソンは釘を刺す。それは、生殖質の連続性のようにただ「ある」のではなく、あらゆるものに「なる」のである（*Ibid.*）。ドゥルーズにとって、生命は、物理 - 化学的な機械論には絶対に還元されえないし、DNAの流れとして描き出されることもない（本書, p.145）。CsOというモデルを持ち出すことで、ドゥルーズは有機体を開かれたシステムとして捉え直そうとするのだ（本書, p.146）。

新たな生物学へ向けて

さて、CsOからパーソンはさらに話を進める。ベルクソンにとっては、エラン・ヴィタルという生命の起源が問題となるのに対し、CsOによって規定されるドゥルーズの「胚的な生命」は、創造的な「生成」の様態が問題となる（本書, p. 190-191）。そして、CsOは立った一つの固有の型ではない。「同時的な、創造的包含（creative involution）」（本書, p.190）であるCsOは、「空間性と質的多様性」を折り込まれた、統一なき中心たる多様体そのものでもある（本書, p. 157）。DNAの流れだけに還元できるほど、この世界は単純なものではない（本書, p. 145）。「複雑性（complexity）」に富んだこの世界を記述する「新たな生物学」（本書, p. 147）の可能性を、パーソンはドゥルーズのユクスキュル読解に見出だしていく。「胚的な生命」であるCsOは、「有機体と環境の共進化（co-evolution）」（本書, p. 146）の一片として自らを生成する。ヴァイスマンによって生殖細胞から切り離された体細胞は、CsOにおいて、再びその価値を見出だされるのである。CsOのなかで構成される有機体の複雑性は、脱領土化の運動によって特徴づけられる（本書, p. 148）のだ。マトゥラーナを引き合いに出しながら語られるオートポイエーシス的な機械的自然発生（本書, p. 147）、そして、外界の環境との「組合せ（assemblages）」として語られるリゾーム（本書, p. 148）、この両者が相見える複雑性の中心こそCsOなのである（本書, p. 191）。最終的に、本書の結論部では、これが次第に「襞（fold）」の議論へと収束していく。

おわりに――本書の射程

冒頭で確認したように、一面ではこの書がドゥルーズの著作群を網羅的にまとめあげたものであること

は否定できない。そして、そこにベルクソスムからの少なからぬ影響を見出だすことは不可能ではない。しかし、本書がもつ現代的意義は「新たな生物学」としてのドゥルーズ哲学の可能性を指し示す点にあり、その視座から見るとベルクソニスムからドゥルーズが受けた影響の大小など大した問題ではないし、この書に言及しつつ述べるようなことでもない。ヴァイスマンの生殖質の生物学を「越えて」、「同じものの反復ではなく、差異の反復」(本書, p. 77）を描き出そうとしたドゥルーズの仕事に、アンセル・パーソンは大きな意義を見出だす。そして、ベルクソンの限界を「越えて」、CsOというかたちで語られる「胚的な生命」は、無機的な生命ですらも包括するような創造的な行動学としての開かれた倫理学へと向かう（本書, p. 59)。こうした一連の流れをおさえてはじめて、ドゥルーズの著作群にひしめく諸概念の一つ一つを、あるいはまさにその「組合せ」としてのドゥルーズ哲学全体の射程を正確に見定めることができるのである。

ところで、本論の冒頭に、この「新たな生物学」の試みを単に形而上学的な概念の戯れとして宙ぶらりんにせず、科学のふるいにかけていくことが重要だと指摘した。実際、本書第三章でパーソンは、ネオ・ダーウィニスムに代表される遺伝的決定論、そしてグッドウィンの議論に代表される環境と有機体の相互作用の生物学を比較しながら、「胚的な生命」の射程を吟味している（本書, pp. 150-152)。これらのいずれか一方に進化や遺伝の原理を見出だすことは、DNAと環境のハイブリッド理論が提唱されつつある現代生物学の水準からして非合理である。CsOの議論は、まさにこうした現代生物学の要請に応えるものではなかろうか。無論、本書が出版された1999年時点では、エピジェネティックな遺伝に関する実験的証拠はそんなに多くはあげられていない。そのことを踏まえると、本書でパーソンがドゥルーズに代弁させて語る「新たな複雑性の生物学」(本書, p. 150）は、実に先鋭的な試みであることが理解されるであろう。

注

1）橘真一「Keith Ansell Pearson, Germinal Life：The difference and Repetition of Deleuze, 1999, Routledge」、『年報人間科学』(第）29号、大阪大学人間科学研究科、2008年、pp. 229-234

2）Keith Ansell Pearson, *Viroid Life: Perspectives on Nietzche and the Transhuman Condition*, Routledge, 1997

3）Keith Ansell Pearson, *Philosophy and the Adventure of the Virtual: Bergson and the Time of Life*, Routledge, 2002

4）Keith Ansell Pearson, Paul-Antoine Miquel, Michael Vaughan, Responses to Evolution: Spencer's Evolutionism, Bergsonism, and Contemporary Biology, *The History of Continental Philosophy*, volume three, Acumen/University of Chicago Press, 2011, pp. 347-379